

アカデミック・ジャパニーズ（AJ） における実践研究とは何か 「研究論文」および「実践報告」とどう違うか

2013年6月22日 於：早稲田大学

門倉正美 kadokura@ynu.ac.jp

構成

1. 「研究論文」「実践研究」「実践報告」
の区分け
2. なぜ・いまAJで「実践研究」なのか
3. 『AJの挑戦』門倉論文を読む

1. 「研究論文」「実践研究」「実践報告」の区分け

『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』投稿規定(AJGのHP掲載)

1. 研究論文: 先行研究の十分な把握の上に明確な研究課題を設定し、具体的なデータにもとづいてオリジナリティのある研究成果を、論理的・実証的に導き出しているもの

2. 展望論文: 当該分野にとって価値ある内容について、先行研究を広く検討し、独自の観点のもとに明確に論述しているもの

3. 実践報告: 当該分野の実践の意図と内容が、実践者間で共有可能な形で、具体的かつわかりやすく示されているもの

『日本語教育』投稿原稿のカテゴリー（NKGのHP掲載）

（1）研究論文：日本語教育および関連領域について、**先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が、具体的なデータを用いて明確に述べられているもの。研究課題が明確に設定されており、データの分析を通して課題への解答が示されていることが必要です。**今後の日本語教育の活動に資する発見や提言などが、**教育実践の結果に基づき実践研究としてまとめられた論文もここに含まれます。**研究論文では、**オリジナリティー、実証性、論理性**を特に重視して査読が行われます。**【先行研究の把握とその研究領域での当該研究の位置づけが必要】**

（2）実践報告：教育現場における**実践の内容が具体的、かつ明示的に述べられているもの。**実践の内容を広く公開し、**共有することの意義が明確に述べられていることが必要です。**実践報告では、**教育への貢献、情報の有用性、会員への啓発**を特に重視して査読が行われます。

両者の共通点

◆研究論文に必要な要素

「明確な課題設定」「先行研究の把握」

「具体的なデータ」「オリジナリティ」

「実証性・論理性」

◆『日本語教育』は「実践研究」を『AJJ』は「展望論文」を研究論文として認める。

◆実践報告に必要な要素

「実践の(意図と)内容」「実践者間での共有」

「具体的かつ明示的(わかりやすく)」

『日本語教育』が「実践研究」を認めた経緯

◆『日本語教育』第126号「実践報告」特集（2005）が先鞭をつけたと思われる。

◆「実践報告」における「普遍性」と「独創性」とは

1. 多くの日本語教師の共感、2. 工夫の斬新さと応用範囲の広さ、3. 読み手が応用したくなる、4. 実践の結果が望ましい、5. 先達の実践に学ぶ

◆実践報告では、失敗事例報告が可能、より多種多様な報告の場が必要

「特集まえがき」より

いくつかの学術雑誌の査読委員を長年務めてきて思うこと

- ◆「明確な課題設定」「具体的なデータ」「実証性」という基準設定は、研究論文のモデルが理科系から発していることを表しているのではないか。
- ◆研究論文＝「原著論文」という言い方がある。
- ◆「研究論文」は「実践報告」よりも価値が高いという暗黙の了解がある。
- ◆「実践研究」や「展望論文」は、理科系の「研究論文」モデルにおさまりきらないが「研究論文」としての価値を認めてあげようという動きがある。

「研究論文」と「実践研究」の区分け

	研究論文	実践研究
先行文献	先行研究	先行実践
独創性	理論世界	実践＋理論世界
普遍性	客観性・実証性	モデル普遍性
	→ 量的・統計	→ 質的・全体的
学問モデル例	物理学	文化人類学
論点の場	実験・調査	人間関係の場

「実践報告」と「実践研究」の区分け

	実践報告	実践研究
先行実践	Better	Must
理論性	Better	Must
普遍性	Better	Must
普遍性の質	まねたくなる	理論※に突き抜ける
反省性※※	Better	Must
失敗実践	Possible	Possible

※「理論」のあり方の探究が必要:「実践研究者コミュニティ」

※※「反省reflection」:「省察的実践」「アクションリサーチ」

2. なぜ・いまAJで「実践研究」なのか

◆AJに限らず、日本語教育は現場を大切にすべき教育研究領域である。

◆にもかかわらず、日本語教育界において「実践研究」が十分に評価されていない。端的に言えば、「研究論文」として評価されにくい現状がある。

◆AJGで、まず率先して「実践研究」を実践し、「研究論文」としての「評価」を得るよう努力しよう。

◆そのためには、3つの課題がある。

1. AJの研究データベースの蓄積
2. AJの「実践研究」の〈評価基準〉づくり
3. すぐれた「実践報告」に学ぶ—それは実践研究ではないか？

「実践研究」論で参考にしたい文献

- ・ドナルド・A. ショーン(2007)『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、中古本のみ
- ・佐藤学(1997)『教師というアポリア: 反省的実践へ』世織書房
- ・秋田喜代美・藤江康彦編(2007)『事例から学ぶ: はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書
- ・ウヴェ・エリック(2002)『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社
- ・細川英雄(2012)『研究活動デザイナー—出会いと対話は何を変えるか』東京図書
- ・小泉潤二・志水宏吉編(2007)『実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ』有斐閣

3. 『AJの挑戦』(ひつじ書房)門倉論文を読む

◆AJとは<教養教育>である。

1. 学び方を学ぶ:「転換期教育」

■総合的学習の「問題発見解決能力」に通じる

→ しかし、「問題を発見する」のが難しい

2. 「市民的教養」の獲得

■市民的教養:高校教科書知識の総体

→ 『現代社会資料集』、佐藤優『読書の技法』

→ 市民的教養を日常生活でいかに応用できるか

■市民としてのコミュニケーション力

→「自分を表現し、他者と出会い、他者をつながる」力

「関心」が「問題」となるには

◆ 単なる「私的な事柄」ではなく、「社会的な問題系へと開かれる」ことが必要だ。

■ 「社会的な問題系へと開かれる」ためには、自分の関心事を「現代社会の課題の一環に組み入れる」力が必要。

→ その力は「市民的教養」が「関心の地平」をなすことから来る。

「コンビニの夜間照明」という「関心」

◆「コンビニはなぜ夜間もこうこうと照明をつけているのか」という「私的な疑問」が「社会的な問題系へと開かれる」とはどういうことか？

■ コンビニの現代消費社会における位置・役割を知ろうとする「市民的教養」が「関心の地平」となって、「コンビニの夜間照明」が「問題」となる

■ そして、それを「問題」とする「自分」が現れる
→ 初めから「自分」を突き詰めなくてよい

ご清聴ありがとうございました。